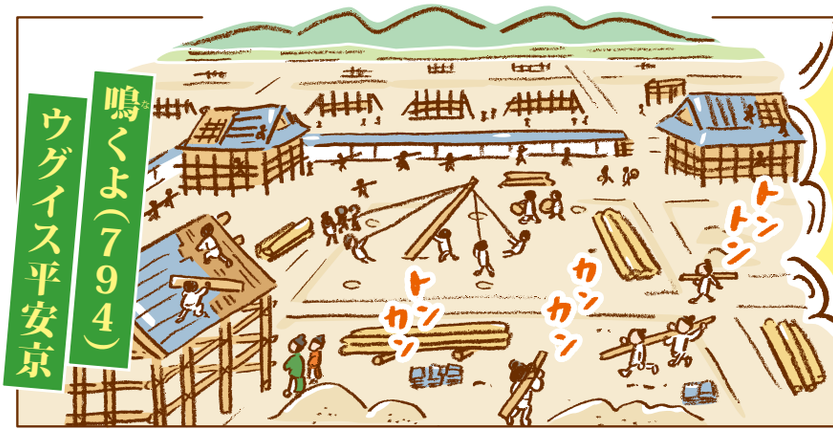
まんがで見る 京都御所の歴史

1

794年（延暦13）
長岡京（現・長岡京市、向日市）から現在の京都市に都が遷されました。

末永く平安の世が続くよう、この都を**平安京**と名付けよう

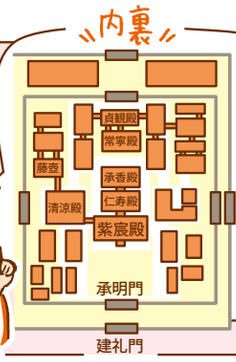
桓武天皇



2

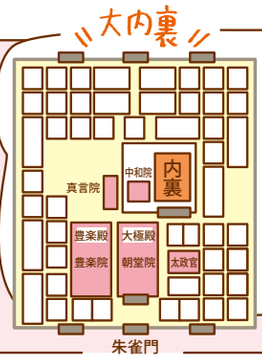
御所って、いまの皇居のこと？

そうじゃ。天皇の住まいを中心とした建物群のことで、**内裏**ともいう。



内裏のまわりにはさまざまな庁舎が建てられ、全体は塀で囲まれていて、その区域を**大内裏**というのだ。

今の官庁街だね。

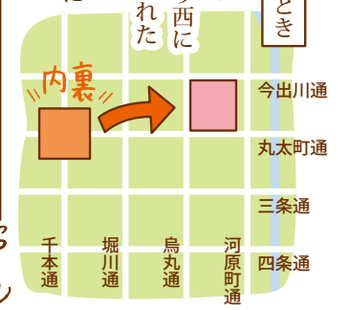


くげ博士

3

平安京ができたとき

内裏は現在の京都御所より西に2kmほど離れた丸太町通千本西付近にありました。



4

なぜいまの場所に移ったの？

内裏は何度も火事になって、そのたびに天皇は公家の邸宅に身を寄せ、再建されるまで一時的に内裏としたのだ。

それを**里内裏**という。

5

1227年（安貞元）の火災以後は、元のところに内裏が再建されることはありませんでした。

6

7

1331年（元弘元）
光厳天皇が里内裏である土御門東洞院殿を居所と定め、以後この邸宅が内裏として定着し、

1392年（明徳3）
南北朝が合一されるとその後は他に移ることなく、この場所が内裏と定まりました。

光厳天皇

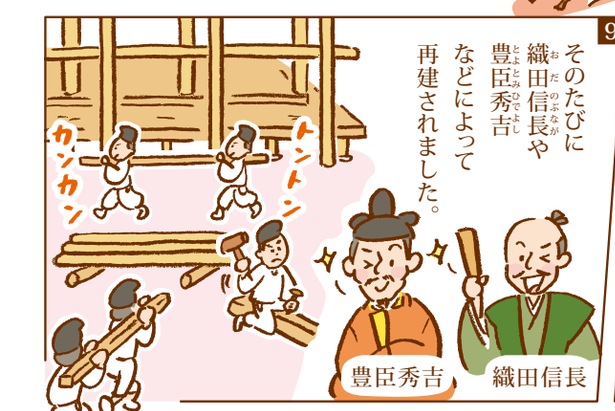
余は、ここに住む。

8

しかしその後も内裏は度々の火災に見舞われ、

9

そのたびに織田信長や豊臣秀吉などによって再建されました。



豊臣秀吉　織田信長

10

1788年（天明8）
天明の大火でまたしても焼失。

江戸幕府は、松平定信に再建を命じました。

＊1790年（寛政2）に完成

それでは、紫宸殿などは平安時代と同じように復元しましょう！

将軍

松平定信

11

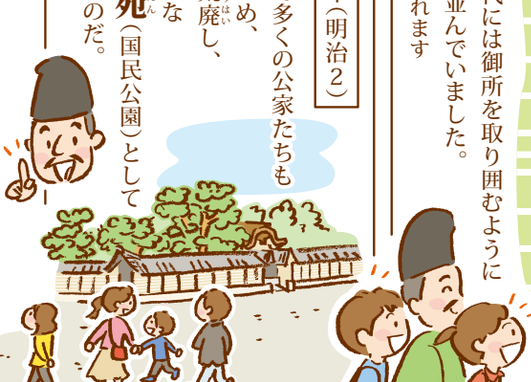
1854年（安政元）
またしても焼失しますが、翌年には寛政時と同じ規模で再建され、これが現在の京都御所の建物です。

また、江戸時代には御所を取り囲むように公家の邸宅が並んでいました。

＊公家町といわれます

12

1869年（明治2）
東京遷都で多くの公家たちも移住したため、公家町は荒廃し、その後広大な**京都御苑**（国民公園）として整備されたのだ。



女流文学が花開いた平安時代

平安時代の初め、文章を書く際には漢字が主に使われていました。やがて「かな文字」が作られ、女性を中心に用いられるようになると、「かな文字」を使って日記や物語を書く女性が現れてきました。日記文学のさきがけとされる藤原道綱母や、宮中で女房として宮仕えをしながら貴族の日常を描いた紫式部や清少納言などです。

紫式部 むらさきしきぶ

- 中級官吏(役人)の藤原為時の娘
- 幼い頃から漢詩文が読める才女
- 30代半ばで一条天皇の皇后・彰子の教育係として宮仕え
- 宮仕えのかたわら、『源氏物語』を書き上げる
- 清少納言に激しいライバル意識を燃やす

『源氏物語』

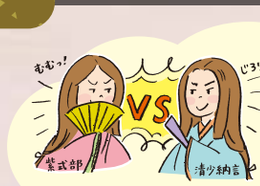
54帖からなり、現在の400字詰め原稿用紙で約2400枚に及ぶ長編物語です。前半は光源氏を主人公として京都を中心に華やかで多様な男女の恋愛物語が描かれ、後半は京都・宇治を舞台に物語が展開します。

清少納言 せいしょうなごん

- 三十六歌仙の一人であった清原元輔の娘で、幼名は諾子
- 幼い頃から和歌や漢文に親しむ
- 28歳の時、一条天皇の皇后・定子の女房として宮仕え
- 博学で才気にあふれ、聡明さは宮中でも評判
- 定子死後は宮仕えを辞め、京都・月の輪の泉涌寺付近で暮らす

『枕草子』

宮中生活を中心に、当時の京都における貴族の生活や四季の行事、風物などを描いたエッセーです。鴨長明の『方丈記』と並んで、日本三大随筆の一つとされています。

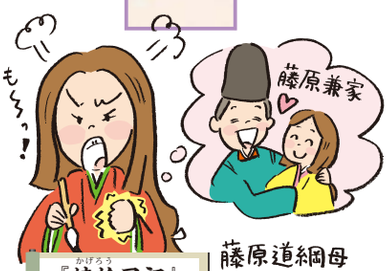


●四方山ばなし

紫式部の清少納言に対するライバル意識は『紫式部日記』の一文からも窺い知れます。いわく、「清少納言ほどわけ知り顔の女はいない。女だてらに漢文を書いているが、よく見れば未熟なものだ…」。

藤原道綱母 ふじわらのみちつなのはは

- 日本三美人の一人に選ばれる美貌の持ち主。右大臣家の三男、藤原兼家と結婚
- 地方官の娘として生まれ、妹は菅原孝標女の母親
- 女流日記文学のさきがけ。紫式部や清少納言に影響を与えた



『蜻蛉日記』

兼家との結婚生活をつづった、女性による初の本格的日記文学です。他の女性に心を移した夫への恨みや嫉妬、息子の道綱への愛情が細やかに記されています。

和泉式部 いずみしきぶ

- 中級官吏の娘として生まれ、一条天皇の皇后・彰子に仕えた女房
- 同僚の紫式部も、その文学的才能を認めた女流歌人
- 自分の感情に素直に、自由奔放に生きた恋多き女性
- 夫、子どものいる身ながら、冷泉院の親王・敦道など多くの男性と浮き名を流す
- 素直で大胆な作風の和歌は、鴨長明も称賛している

『和泉式部日記』

敦道親王とのなれそめから、和泉式部が宮邸に仕えるようになるまでの半年余りの様子が綴られ、2人の和歌のやり取りが多くおさめられた作品です。『和泉式部物語』と呼ばれることもあります。

赤染衛門 あかぞめえもん

- 藤原道長の正妻である倫子やその娘の彰子に仕えた女房
- 和歌の才能は和泉式部と並ぶと評され、歌集に『赤染衛門集』がある
- 紫式部、和泉式部、清少納言とも親交があった
- 『栄花物語』正編の作者とされている(＊栄花物語には続編があります)

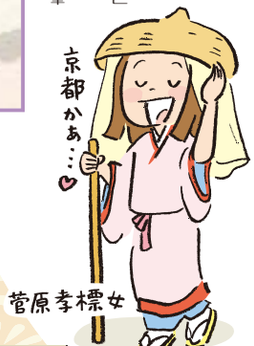
『栄花物語』

宇多天皇から堀河天皇までの約200年間の宮廷を中心とする貴族社会の歴史を、編年体で物語風に記され、特に藤原道長の栄華を称えることが中心となっています。

(＊編年体:起こった出来事を年代順に記していく方法)

菅原孝標女 すがわらたかすえのむすめ

- 父・孝標は菅原道真の玄孫で、伯母は『蜻蛉日記』の作者、藤原道綱母
- 少女時代に『源氏物語』に出会い、物語の世界に強く惹かれる「源氏物語オタク」
- 後に後朱雀天皇の娘に仕え、『更級日記』や「夜半の寝覚(＊「夜の寝覚」ともいう)」などを執筆



『更級日記』

受領であった父の解任で、赴任先である上総国から京都に上る紀行に始まり、京の生活や宮廷の生活などおよそ40年にわたる女の一生が記されています。

(＊受領:中央から派遣された役人で、税の徴収を主な仕事とする)

季節を祝う宮中行事
――節句（節供）

五節句
- ◆人日（1月7日）
- ◆上巳（3月3日）
- ◆端午（5月5日）
- ◆七夕（7月7日）
- ◆重陽（9月9日）

節句とは、季節の節目に健康長寿や豊作、子孫繁栄などを願う行事。中国の暦法と日本の農耕の風習が合わさったもので、宮中では定められた日に邪気を祓う宴会が催されるようになり「節句（節供）」といわれるようになりました。
平安時代には、元日、白馬、踏歌、端午、豊明が五節会として重んじられ、江戸時代、幕府が特に重要な節目として式日（祝日）に定めたことで庶民の暮らしの中で根付いていきました。この制度は明治6年に廃止されていますが、現在も季節を楽しむ行事として定着しています。

人日

中国の風習と日本の風習が結びついたものが「七草がゆ」

古来中国では、正月の7日目を人の日（人日）とし、犯罪者に対する刑罰は行わないことにしていました。また、この日には7種類の野菜（七草）を入れた羹を食べる習慣があり、これが日本に伝わり、七草がゆとなりました。日本では平安時代から始められ、江戸時代より一般に定着、七草がゆを食べて1年の豊作と無病息災を願います。

七草がゆ

―中国
旧暦1月7日に、「七種菜羹」という七種類の野菜を入れた羹（熱く煮た吸い物）を食べて無病を祈る習慣。
―日本
古来、年の初めに野に出て芽を出し始めた草を摘み取る「若菜摘」が行われていた。
―七草とは
●セリ ●ナズナ ●オギョウ（ゴギョウとも） ●ハコベラ（「ハコベ」のこと）
●ホトケノザ ●スズナ（「カブ・蕪」のこと）
●スズシロ（ダイコン・大根」のこと）

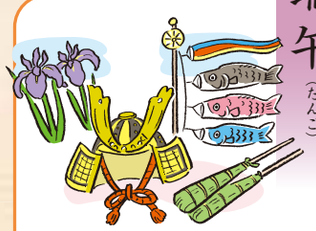
上巳

元々は中国古代の禊ぎの行事で、日本では草やわらで作った人形で体をなで穢れを移し、川や海に流して災厄を祓う農村儀礼が行われており、平安貴族はこの日に曲水の宴を行いました。また、子女はこの人形で〝雛あそび〟をし、これが後にひな人形になったといわれています。現在では、女の子の誕生と成長を祝う「雛まつり」として一般に浸透しています。

曲水の宴

平安時代に朝廷や公家の間で行なわれた年中行事の一つ。3月3日の桃の節句に、参加者各自が曲がりくねった小川の前に座り、上流から流される杯が自分の前を通り過ぎる前に詩歌を詠み、杯を取り上げて酒を飲みます。詠んだ詩歌は、別堂で節をつけて朗詠されます。現在も、上賀茂神社や城南宮、北野天満宮で行われています。

端午



旧暦では午の月は5月にあたり、5月の最初の午の日（5日）を節句として祝っていたものが、後に「端午の節句」となりました。宮中では、強い香気で厄を祓う菖蒲を髪にさした人々が武徳殿に集い、天皇から薬玉を賜りました。鎌倉時代ごろから、「菖蒲」が「尚武」に通じることなどから、男の子の成長を祝い、健康を祈るようになりました。

薬玉とは？

薬草、香草、香料を錦の袋に詰めて、造花などで飾り付けし、五色の糸でたらした入れ物で延命長寿、無病息災の願い込めたものです。中国ではこれを魔除けに使用する道具として端午の節句などに使用されていました。

七夕（しちせき・たなばた）

牽牛と織女の2つの星を祀って、手芸や芸能の上達を願う「乞巧奠」という中国の行事が奈良時代に伝わり、平安時代の宮中では願い事を力ジの葉に書いて、詩歌・裁縫・染織などの技芸上達を願い、江戸時代には手習い事の願掛けとして一般庶民にも広がりました。「たなばた」と読むのは、元からあった日本の棚機津女の伝説と合わさって生まれたといわれています。

棚機津女の伝説

機を織る女性を棚機津女といい、棚機津女に選ばれた女性は7月6日に水辺の機屋にこもって神が着る衣を織り、神の訪れを待ちます。その夜、棚機津女は神の妻となり、7日の夕刻に仕上げた衣を置いて機屋を出ます。この時水辺で禊ぎを行うと、神は人々の厄災を持ち去ると言われています。

重陽

菊の節句とも呼ばれます。菊は長寿をもたらす花で、強い香りで邪気を祓うとされ、日本では平安時代初期に貴族の宮中行事として取り入れられ、中国から伝来した菊を眺めながら「菊酒」を飲む「菊花の宴」が行われていました。前の晩に菊に綿を被せておき、九日の朝、露と香りのしみこんだ綿で体を拭いて不老長寿を願う「被せ綿」は、重陽の節句を象徴する行事です。

奇数は吉数

中国の陰陽思想では奇数は「積極的な面を表現するめでたい数字（陽）」とされ、偶数は「日の当たらない陰の数字」とされていました。陽数では最大の9が重なる日であることから「重陽」とされましたが、奇数の重なる月日は陽の気が強すぎるため不吉とされ、それを払う行事として節句が行なわれていましたが、後、陽の重なりを吉祥とする考えに転じ、祝い事となったものです。

十二単

—じゅうにひとえ—

貴族の女性の正装

十二単は平安時代の中期に完成した女房装束の儀服で、正式には「五衣唐衣裳」といいます。宮中の儀式など、公家女房の晴れの装いとして用いられました。現在では御即位の大礼の儀、皇族妃の御成婚の儀に用いられます。

*女房:宮廷に仕えた女性たちの総称で、主に皇后(中宮)の教育係や身の回りの世話、話し相手などを務めます。

唐衣(からぎぬ)
装束の一番上に着る衣。十二単の装束の中で一番美しく構成され、唐服を模したところから唐衣と言われる。

表着(うえのきぬ・うはぎ)
唐衣の下に着る袿で、多くの袿の一番上に着るのでこの名があり、下に着る五衣の襲を見せるため少し小さめに作られている。

単衣(ひとえ)
袿の下に着るもの。形は袿と同じだが、裄と丈が他の袿より大きく長く仕立てられている。

打衣(うちぎぬ)
表着の下に着る袿で、打衣の名称はもと紅の綾を砧でうって光沢を出したことからつけられた。

五衣(いつつぎぬ)
袿を五枚重ねて着るので五衣とよばれるが、形や大きさは表着と変わらない。

裳(も)
奈良時代には腰に巻いたものだったが、平安時代に腰に当てて結び、後ろに垂れて引くものになった。

長袴(ながばかま)
筒形の袴で、裾は後ろに長く引く。表裏とも緋色。

見どころは、重ねた五衣の美しいグラデーション

(襲の色目)

貴族の男性や女性の装束に用いられた着物の表と裏のとり合わせ、または着物と着物を重ねて着た場合の色の組み合わせを襲(重)の色目といいます。より美しく装うための美的表現を目的としていたようで、その一つ一つのとり合わせにゆかしい季節の草花の名前をつけたり、季節感を表わすような優雅で風情ある名前をつけて呼んでいました。

本当に12枚も着ていた?

十二単の「十二」というのは、「十二分に」という言葉があるように「たくさん」を意味するもので、12枚の衣ということではありません。衣裳の構成は時代によって変化しますが、基本的に身につけるものとして、「唐衣」、「表着」、「打衣」、「五衣」、「単衣」で、そこに「裳」をつけて「長袴」をはきます。重さはおよそ20kgになるそうです。